

《研究報告》

精神看護学実習が臨地実習指導者に及ぼす影響

— K病院の指導者の意識から —

東中須 恵子¹⁾, 神 郡 博¹⁾

要旨：教育現場においては自分で考え、相手を深く理解する力を育てる臨地実習に多くの期待感を持っている。特に精神看護学においては、学生が体験した感情を振り返りながら、精神に障害を持つ対象者の理解や、日常生活の自立への援助方法を学ぶことから、臨地実習指導者への期待は大きく、連携を強化する必要性を強く感じている。看護学生が臨地実習で看護師と共に対象者に必要な援助を創造し判断能力へ統合されていく過程は、系統だった臨床意思決定 (decision making) の思考プロセスの学習には有効であると考えられる。しかし、学内での学習に比べ臨地においては指導者が勤務との兼務が多いため指導体制が一様でなく複雑であることは否定できない。

3校の看護専門学校で臨地実習を受け入れている、単科精神科病院に勤務する臨地実習指導者に、指導業務についてどのように考えているのか意識調査を行った。その結果、6名の実習指導者の背景は異なるものの、臨地実習指導には満足していることや、日常業務との兼務や自己啓発のための研修への参加など配慮してほしいと考えていることがわかった。また、学生の記録や受け持った患者へのフォロー等、夜勤明けに実施していることや、担当教員との連携が取れているとは言い難いという回答も得られた。一方、精神科看護が好きであり、学生と関わることは自分の成長にも役立つと考えていることがわかった。

その結果、実習現場と教育現場が協力して、臨地実習指導者の援助体制を整えることが急務であることが示唆された。

キーワード：精神科臨地実習、臨地実習指導者、意識調査

はじめに

臨地実習（以後実習とする）は、学内で学ぶことのできない専門的な知識、技術、態度を学生自らが体験し、看護に対する関心や意欲を高め看護観を形成することができる重要な教育の場である。精神看護学における臨地実習は主に精神科病院で行われるが、精神看護学実習を実施するにあたり精神科の医療がいまだに閉鎖的治療環境であり、人権を制限する行為の改善を無視しているという社会的偏見を受けているという現実即し、学生の実習をどのように展開すればよいのか模索している状況でもある。こうした現状において、精神に障害を持つ人たちの人権や福祉に関連した

法的制度の確立や治療技術の変化に伴い、現状の実習目的や目標達成のために実習場の協力なくして臨地実習は実現しないといっても過言ではない。特に臨地実習指導者（以後実習指導者とする）と担当教員の指導の連携は、学生の実習目標の到達に重要かつ不可欠でより深い協働が求められる。村松（2003）らは「臨地実習の教育効果については指導者側も教員側も認知しており、お互いの連携を強化する必要性を強く感じている」としている。しかし、どのような方法で連携を強化していくのかについてはそれぞれの施設の実情に合わせた検討が必要である。そこで、本研究では連携を強化するための方策を検討する基礎資料として、一施設の実習指導者を対象とした意識調査を実施した。

1) 弘前学院大学看護学部 〒036-8231 弘前市稔町20-7
TEL: 0172-31-7162, FAX: 0172-31-7101

表1. 臨地実習指導者の背景

性別	年齢	経 験		講習会受講
		精神科臨床看護歴	隣地実習指導歴	
A氏(男)	65	40年	34年	受講していない
B氏(男)	32	4年	3年	受講している
C氏(男)	41	16年	9年	受講している
D氏(女)	54	3年	1年	受講している
E氏(女)	53	3年	1年	受講していない
F氏(女)	59	5年	1年	受講している

研究目的

単科精神病院における実習指導者への意識調査から、実習指導者の実習への取り組み方を知り、教員との連携のための課題を明らかにする。

研究方法

1) 研究対象

K精神病院臨地実習指導者6名

2) 調査方法

2004年日本精神科看護技術協会が作成した「精神看護学実習指導者に対する意識調査アンケート」を使用したアンケート調査と面接。設問の使用については日本精神科看護技術協会の承諾を得た。アンケート調査の回答は二者択一、または、「非常に思う～全く思わない」の5段階評価とした。面接では、調査用紙に各自で記入後個別に面接を行い、回答の理由についての確認を行った。

3) 分析方法

結果は単純集計し、調査項目ごとの傾向をみた。

4) 倫理的配慮

研究の趣旨、①個人のプライバシーの保持、②結果の公開を個別的に文書と口頭で説明し、研究終了後に対象者に内容を開示して了解を得た。

結 果

1) データ収集期間

2004年7月～8月

2) 対象施設、実習指導者の背景(表1)

対象施設は、345床の病床、6単位の病棟を持つ精神科の単科病院である。3校の看護専門学校の学生を受け入れ、6名の指導者が指導にあっている。

実習指導者の背景を表1に示した。6名中4名が50歳以上であり、2名が指導者講習会を未受講であった。1名を除いて精神科臨床経験3年以上で実習指導を担当しており、実習指導歴は3年以上が3名、1年が3名だった。

3) 1回の実習で受け持った学生の数、実習担当者の数

1回の実習で受け持った学生の数は1名～3名で平均2名であり、全員が受け持ち学生数や指導担当者数は適当であるとした。面接では、ほとんどの指導者が学生の実習中においても他のスタッフと同様の業務を行っており、不在の時には指導業務が他のスタッフによってフォローされていると話した。

4) 指導業務内容(図1)

実習指導者全員が行っている指導業務は、学生の記録の評価、受け持ち患者の選定、病棟のオリエンテーションだった。次に学生カンファレンスへの出席、患者へのフォロー、実習の成績をつける、日常ケアへの指導を半数以上が担当していた。病院オリエンテーション、医師やスタッフとの連絡調整、実習中の講義を担当している人は1名であった。

面接では、病院オリエンテーションは実習担当教員が行い、病棟オリエンテーションはそれぞれの病棟で異なっており、病棟によっては病棟師長が患者紹介と併せて実施することもある。日常ケアの指導はプライマリナースに指導を依頼している指導者もいる。また、指導が継続的に行われるように伝達ノートを作成していると話した。

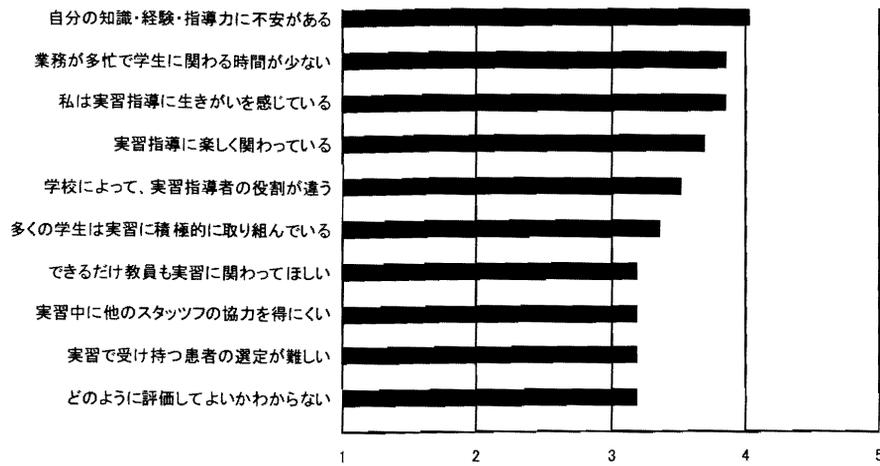


図2. 実習指導者の意識

点

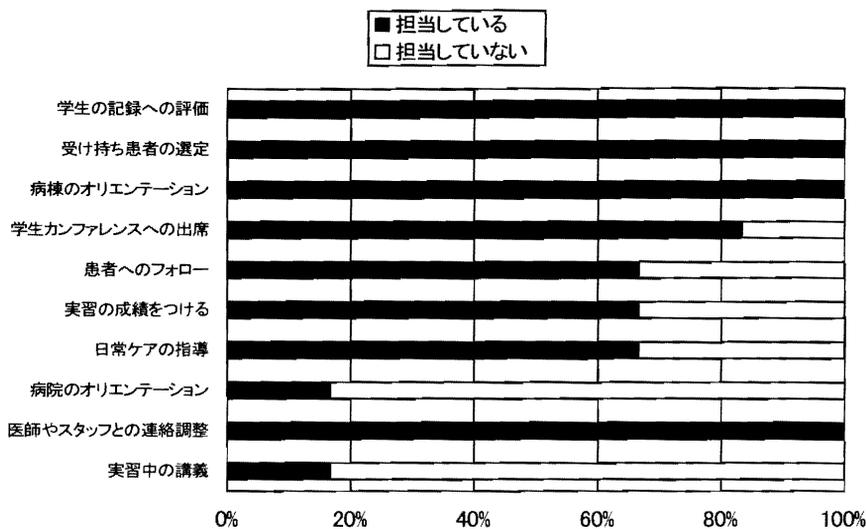


図3. 実習指導時間外に行っている業務

5) 実習指導者の意識 (図2)

設問ごとの平均点をみると、「知識・経験・指導力の不足」が4.0点と最も高く、「業務が多忙で学生に関わる時間が少ない」が3.8点だったが、以下は「実習指導に生きがいを感じている」「実習指導に楽しく関わっている」であった。

面接では全員が指導力に不安はあったものの管理者の指名によるため承諾したと話した。面接では、指導者研修を受講していないA氏、E氏は、これまでの経験を請われ学生指導に関わっているが、臨地実習指導研修を受講していないことから体験的に実習指導を行っていることに、常にこれでいいのかと不安を抱えながら学生と関わっていると話した。学校教員と受け持ち患者の選定や評価に関する視点など、相談できる時間が欲しいと話した。

5) 実習時間外に行っている業務 (図3)

ほぼ全員が行っている実習時間外業務は実習記録の整理で、82%であった。実習生への指導やスタッフ・医師への協力の要請及びフォローは0%であった。

面接では、休日や夜勤勤務後に居残りをして実習記録へのコメントを書いているとした人もあった。その理由としては、特に看護計画や看護過程記録などのアドバイスは、看護学生の実習目標に繋がっているという考えから責任を感じていると話した。実習指導者同士の連絡や相談の内容は、これらの情報交換や意見交換であると話した。

6) 実習指導者への配慮 (表2)

配慮があると回答した指導者は2名であった。面接で勤務体制が配慮されていると感じると話した。1名

表2. 実習指導者への配慮 <回答を○で示した>

施設では実習指導者に勤務上の配慮をしているか	A	B	C	D	E	F
1. 配慮がある		○	○			
2. 配慮がない	○			○	○	○
業務上配慮してほしいことは何か 配慮されていること						
1. 勤務体制への配慮	○	○	○	○	○	○
2. 指導手当での支給			○			
3. 一般業務の免除	○			○	○	○
4. 研修への参加支援		○				

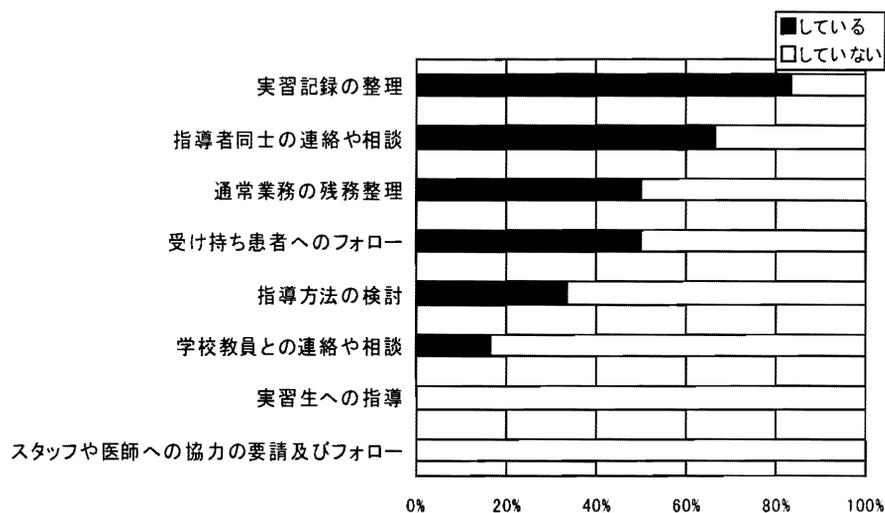


図3. 実習指導時間外に行っている業務

が指導手当での支給を希望しているが、面接によると実習記録の整理や指導者間同士の連絡や、相談に時間外勤務が多い事などから、高額でなくてもよいので指導者としての役割を認めてほしいと話した。また、全員が自己研鑽のため院外で行われる実習指導者へのフォローアップ研修や、精神科看護に関する研修への参加を希望していると話した。

7) 実習指導者、学校教員（担当教員）、病棟スタッフとの連携（図4）

学校教員（担当教員）との連携は・・・

面接では、3名は学校教員が実習場にいる時積極的に関わるように工夫している。3名は学校教員と、実習期間中に学生が行っている実施内容や進行状況について情報交換が難しいと回答した。ほとんどの担当教員は実習中にも学校での講義や会議を多く抱えており、時間的な余裕がないように感じられるため話しかけることに躊躇してしまうと話した。

8) 実習指導者の精神科実習についての考え（図5）

「実習指導に積極的に取り組んでいる」を除き、平均点が4点以上であった。面接では、学生とのカンファレンスや実習記録への指導は、マンネリ化する自分の看護観を刺激してくれると考えていると話した。また、担当教員が学生に行うアドバイスは、患者へのケアへの気づきに役立つと話した。

9) 精神科看護について感じていること（図6）

「精神科看護は社会的に認められていると思う」を除き、平均点が4点以上だった。面接で、学生は実習中、精神科看護が好きであると言ってくれるが、就職に結びついていないと感じており、まだ、社会的偏見をもたれていると感じると話した。また、指導者のほとんどが、精神科病院に勤務していることを特別視される経験を持っていた。しかし、患者への援助が見えず学生への指導で戸惑うものの、患者との関係づくりに看護者自身が媒体になっていくことや、自分自身の成長が期待できる領域であると考えているので魅

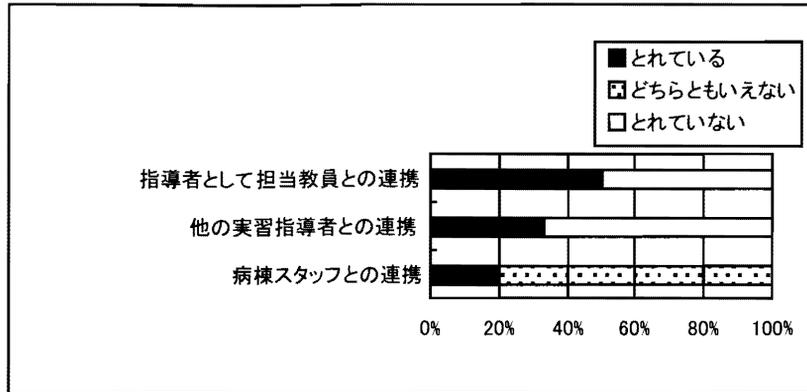


図4. スタッフ・学校教員（担当）・病棟スタッフとの連携

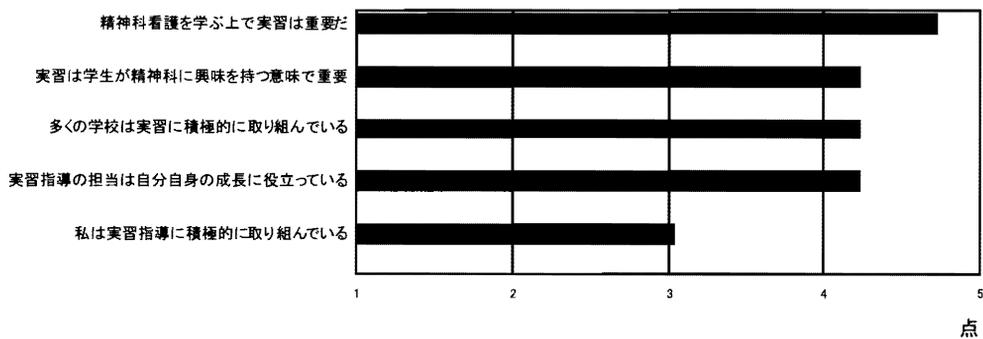


図5. 精神科実習についての考え

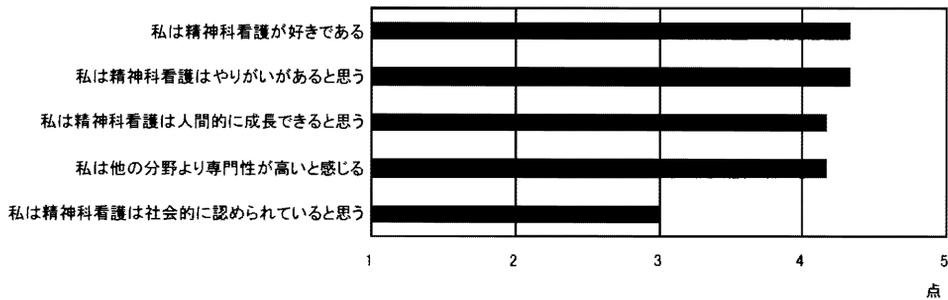


図6. 精神科看護について感じていること

力を感じていると話した。

考 察

K病院における指導者の現状

K病院の指導者は、自分の知識や経験・指導力に自信がなく指導者としての役割に不安を抱えているが、実習指導は自分の成長に役立つと前向きに考え実習指導を行っていた。指導者の取り組みは、業務が多忙で学生に関わる時間が少ないものの、学生が精神科看護を学び、精神科に興味を持つ意味で実習は重要であると考えていることから、役割を果たそうと努力してい

ることが考えられる。しかし、実習記録へのコメントや看護過程などのアドバイスは時間外に行われていることなどから、できる事なら学生の実習期間中は他の業務を免除してほしいと願っていた。K病院は6単位の病棟に各一人ずつの指導者が配置されているが、新しい指導者を育てられずにいる現状があるのではないかと推測される。指導者は自分の指導に自信がなく、研修に参加することや、担当教員と学生の実習内容や方法について情報交換を希望していることなどから、実習指導への不安も抱えている。こうしたことを鑑み、指導者の育成に目を向けることが必要ではないかと考える。

以下、K病院の実習指導の指導者への教育、担当教員との連携について考察する。

1. K病院実習指導者への教育

K病院の実習指導者は、実習指導者講習会（講習会という）の未受講者が2名であった。講習会を受講した者の中には指導歴1年の者が2名、3年が1名いた。精神科臨床経験歴から身体科の臨床経験後精神科病院に勤務し、実習指導を担っていることが推測される。

先に日本精神科看護技術協会（2004）が行った、精神看護学実習指導者に対する意識調査報告書によると、「実習指導者の約半数は、管理者やそれに次ぐような経験年数のある看護師であった。……自分の臨床経験で実習指導を担っている現状が示唆された。これは、新しい実習指導者を育てられずにいる現状があると推測される」といっている。精神科における臨床経験が浅い事などから、学生への指導は重責となっているのではないかと考えられる。

精神科看護に関する新しい知識の情報が得られる研修会などを受講し、ステップアップしながら学生へ指導したいと願っているが、患者への関わりやケアなどの実務的な指導より看護記録など知識の指導について、より不安を抱えているのではないかと考えられる。その解決のために、指導者同士の連絡や相談、指導方法の検討などを院内においても行う必要があり、既存する実習委員会を充実させるような検討が必要であると考えられる。また、実習指導にやりがいを持つよう看護管理者は、指導者の職務評価を十分にし、業務を行う上でスタッフの理解が得られるよう、柔軟な看護管理を行う必要があるのではないかと考える。

橋田（2004）の「実習に関して指導者として考えていること」の報告によると、指導時間がないことや自分の指導能力への迷いが、不適切な実習環境として認識され非効果的な実習方法と感ぜられることが明らかになっている。指導者もまた、自己の役割を肯定的に認識し指導者としての成長が見えたときに役割意識がより向上するのではないかと考えられる。

K病院の指導者は、精神科看護を他の分野より専門性が高く人間的にも成長できると感じているので、指導者を育てるための援助体制を実習場と教育現場が共に検討することが大切であると考えられる。

2. 実習指導者と担当教員の連携

橋田（2004）は、「看護師は実習指導に対する意識の違いがあり、また、実習内容の理解が充分でないために学生の到達レベルに応じた指導への迷いが生じている」といっている。また、日本精神科看護技術協会（2003）が行った精神看護学教員に対する意識調査によると「精神看護学の専任教員は22.9%にしか過ぎず、実習において過半数が教員の指導力が不足していると教員自身の困りをあげている」と報告している。学校の求める実習の目的や実習目標をスタッフにも明確にして、組織的に臨床と学校が連携していくことが必要であると考えられる。

K病院においては、実習開始前に担当教員と打ち合わせが充分に行われており、学生の実習目標や実習の方法が指導者間に共通に理解されていると考えられる。しかし、指導者は実習の評価や実習記録へのコメント、看護計画のアドバイスを夜勤明けなどの勤務時間外に行っており、学生への指導に自信が無いことも相まって、心的負担は大きいと考えられ、それを軽減するために担当教員との連携は重要であると考えられる。しかし、K病院の指導者は、実習中であるにも関わらず学校での講義や会議を多く抱えていることから教員に時間的な余裕がないように感じられ、相談話し掛けることを躊躇してしまうと考えている。

指導者は担当教員とスタッフとの連携については6名中3名がとれていない、どちらともいえないと回答しているものの、自分の指導内容に迷いを持ちながら学生に関わっていることが考えられる。日本精神科看護技術協会（2004）が行った精神看護実習指導者に対する意識調査報告によると「指導者は看護教員は精神科看護に対して消極的であり、ほとんどの教育を臨地実習受け入れ施設に託しているケースがあり……学校の精神科看護教育のあり方の見直しを求める声がある」と報告している。

教員は、実習内容や方法について指導者やスタッフと共に考え、共通理解し、指導上の役割分担を明確にすることで、指導者やスタッフの指導業務への意欲の向上を図り、学生にとってより良い実習を展開することができるのではないかと考える。一方、指導者にとっては学生の言動や記録から学生がその患者への援助をどう考え行動しているのかを予想し、学生が看護し評価できるよう指導するのであるが、指導者には看護者としての専門的な判断と看護技術が要求されると

考える。実習指導者と担当教員が連携を強化することは、学生の課題到達のためにも重要であると共に、精神科看護を行うに必要な知識と技術の質の向上に繋がると考えられる。学校と実習病院の合同研修会や学習会の開催も、必要な知識や技術の共有のためには必要ではないかと考える。

ま と め

K精神科病院の指導者が、指導について考えていることは以下のことであった。

1. 精神科看護実習の必要性については意識が高く、自分も学生も成長する。
2. 教員や他指導者・病棟スタッフとの連携が取れていない。学生の実習評価や受け持ち患者選定に悩んでいる。
3. 実習記録の整理や受け持ち患者フォローなど時間外業務が多い。
4. 指導があるときは日常業務の免除をしてほしい。
5. 精神科看護への満足はあるが、指導への満足はあまりない。

以上のことから、今後の課題として

1. 実習指導者講習会の受講の意義や必要性について

認知する。

2. 実習指導が指導者と担当教員の連携によって行われるよう知識や技術を共有できるよう研修会などを企画する。

*本研究は日本看護科学学会第25回学術集会において「精神看護学における臨地実習指導者の現状と課題」として発表したものに加筆・修正したものである。

文 献

- 1) 橋田由吏(2004), 臨地実習における看護師の実習に関する意識-実習指導についての自由記述より-看護教育論文集 262-264.
- 2) 日本精神科看護技術協会(2003), 精神科領域における看護職員確保に関する研究-精神看護学教員に対する意識調査-
- 3) 日本精神科看護技術協会(2004), 精神科領域における看護職員確保に関する研究-精神看護実習者に対する意識調査-
- 4) 村松仁(2004), 看護学教育における実習施設との連携に関する研究第1報教員の実習指導体制について 日本看護学教育学会学術集会講演集, 87
- 5) 村島さい子(2001), 実習生の経験と向き合う臨床実習教育-より重要となる教師と実習指導者の協力-, 看護教育, 42(2), 94-98

Current conditions and tasks of on-the-job training instructors in the science of psychiatric nursing

Keiko HIGASHINAKASU¹⁾ and Hiroshi KAMIGORI¹⁾

Abstract : In the education field, we expect a lot from on-the-job training designed to help students develop their ability to think on their own and to have a deep understanding of other people. In the science of psychiatric nursing, we have great expectations of on-the-job training instructors and feel a strong need to strengthen our ties with them, because it will allow students to better understand mentally disabled people by recalling the feelings the students have experienced and learn how to assist the disabled in becoming independent in their daily lives. The creation by nursing students and professional nurses of a support program for patients and its application to their judgment skills in practical training sessions is an effective approach to learning thought processes in systematic clinical decision-making. However, there is no denying that on-the-job training, compared with learning on campus, lacks systematic instruction and is more complicated, because the instructors mostly double as nurses.

We surveyed the attitudes of on-the-job training instructors who work at psychiatric-only hospitals that offer an internship program for two nursing schools. Six instructors with different backgrounds said that, while they are satisfied with their training jobs, they want some consideration to be given to balancing their routine work and training jobs with their wishes to participate in self-development seminars. The instructors keep records of the students and follow up on the patients they had under their care after the night shift, and are not in close alliance with the teachers in charge. They like psychiatric nursing, and think that staying in touch with students helps them grow.

We suggest that improving support for on-the-job training instructors through the cooperation of those involved in on-the-job training and education is urgently needed.

Key words : Psychiatry on-the-job training, On-the-job training instructor, Attitude survey

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University, 20-7 Minorichou, Hirosaki 036-8231, Japan
TEL: 0172-31-7162, FAX: 0172-31-7101